

911.3



5

怪補

平江縣志

附錄

五

雜之卷目錄

賦物之事

一兼
オハ

和漢の事

ニ
オハ

万句十百韻

ニ
ウハ

百韻の式

ニ
ウハ

米字の式

ニ
ウハ

七十一候の式

ニ
ウハ

易の式

ニ
ウハ

源氏の式

ニ
ウハ

五十韻の式

ニ
オハ

四十四の式

ニ
オハ

歌仙の式

ニ
オハ

長哥行の式

ニ
オハ

短歌行の式

ニ
オハ

十八公の式

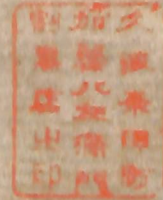
ニ
オハ

首尾の式

ニ
オハ

表合の式

ニ
ウハ



增補俳諧類聚記并草

雜之部

曲亭主人纂輔

江戸 藍亭青藍増補

卷之七 賦物

貞徳云連哥六五箇十箇五
賦物など俳諧は百韻

から、俳言まで賦もの連哥を、端作りの俳諧は百韻

書き、云○蕉門や賦物の沙汰あり、これ心得の、

小大略と記す、（わらう）もあひ草土賦物の文字耳、小立字は面を映

賦し物の文字、さうあり、文字とてわらう、五箇ふ

ど、いふ事ゆれ、発句ふちふち、奥の文字とて

たとへ山櫻の発句ふた、さう、大い山も、

故、蜂の魚くさ、さう、餘はる、下准、一字露頭

二字逐音以下、百韻の俳諧、さう、べうら、

二年

賦何衣連哥

年毎ふみまどと花ハ櫻の都

賦何袋俳諧

あれふ、いづれ何ふ、世々の春

られ上賦と、いふのあり、端作りの何と、字ハあ、

のやうある物、く、句中の春と、入字と呼ぶ、さう

發句の事

三

脇句の事

三

第三の事

四

四句目の事

四

月花定座

四

去嫌大意

五

句數並去嫌

六

季節の跨物

七

嫌式八ヶ條

八

指合の事

九

正花の事

十

戀の詞

十一

切字の事

十二

発句の格

十三

押字の格

十四

抱字の格

十五

増補俳諧歌詠記草

雜之部

曲亭主人纂輔
江戸 藍亭青藍増補

「卷之六」 賦物

貞徳云連哥六五箇十箇
と賦物といふは俳諧は百韻を

から、俳言をて賦も連哥をれ、端作りとも俳諧之連哥
書きとく、○蕉門に賦物の沙汰あり、これと心得の

小大略と記す、もあひ草に賦物の文字、且小立字一面を嫌
賦し物の文字、さうよりする文字とともわかれ、五箇を

といふ事ゆゑに、発句ふちとて、奥の文字とて、
たとへば、山櫻の発句ふちとて、大いの山も、

故く蜂の魚くちとて、大いの餘るも、大いの一字露頭
二字返音以下、百韻の俳諧、やとて、うとて、

賦何衣連哥

年毎ふみどいと花は櫻の卯

賦何袋俳諧

あれも、いづれ何とて、世々の春

らん、上賦といふものあり、端作りの何とて、ふ字ふちとて、
のやうなる物なく、句中の春といふ字と呼ぶやうあり

雜

三字上畧

蝶鳥やちりうひとまる花畠

是ハとまるの上と畧して九と取らる

三字下畧

月ハひとの影ハ目数のふりうが

是ハひとつのつ文字と畧して人と取らる。此外四字上下畧あつハ難波津と上下畧せ庭とあるやうの事又五文字中三字畧あつハつむらふといふと中三字畧せハ爪とあるとハ又二字借とるハ白雪ハ山の額の化粧の形これハ句中のけと毛と聞せらる

二字除篇

龍門あらで都へのうと鱈の魚

是ハ鱈といふ字の魚篇と取て雪とは立し

他 漆

鶯やよむ奇毎ふさね題目

是ハ毎の字ハ篇と添て梅とあつちり

和漢之事

大々俳諧の法と守るべし和漢ともふ

五句を以て限りとも但し漢の對ふ至の

六句ハ可及事景物草木亦貞教和漢ハ通用をべし

百韻ハ一の物ハ和のうより出たらハ漢ハまゝ異名あて

用ふともあつべし二句の物ハ一つハ万葉の書分ホ

用ふべし和漢ハと奉句と漢ハをべし漢和ハ和の

奉句ハ和漢ハ漢ハ韻字と用ふべし漢和ハ漢ハ韻ハ

春袋と取る物あり始の句ハ花衣と取る

猿 何

天の川水若うりりとうね

是ハ猿若と取る物あり餘ハ准へる

一字露頭

ちぢうゝゝ寝ぬい浮世の杜宇

是ハ句中の寝と音ハ取ふ

二字更音

龍で飼ふるも高し時鳥

是ハ句中のさをもとめて杉と聞ふ

三字中畧

去る来る年のわめや魚千里

是ハわめとふ字の中を畧して綱と取ふ

三字上畧

蝶鳥やちりうひとまる花畠

是ハとまるの上を畧して丸と取ふ

三字下畧

月ハひと影ハ目数のおうり

是ハひとつのつ文字を畧して人と取ふ

下畧あゝハ難波津と上下畧せ庭とあるやうの事又

五文字中三字畧あゝハつとらあといふ中三字畧せ

ハ爪とあるとらハ又一字借とらハ白雪ハ山の額の化粧

ハ形とれハ句中のけと毛と聞せ

二字除篇

龍門あらで都へのうと鱈の魚

是ハ鱈といふ字の魚篇と取て雪とは立

他 添

鶯やよむ奇毎ふさね題目

是ハ毎の字ハ篇と添て梅とある

和漢之事

大々俳諧の法と守ふし和漢ともふ

六句ハ可及事景物草木亦貞教和漢ハ通用を

百韻ハ一の物ハ和のとより出たらハ漢ハまゝ異名あて

用ふともあて二句の物ハ一つハ万葉の書分ハ

用ふとも和漢ハも奉句と漢ハをへし漢和ハ和の

奉句ハ和漢ハ漢ハ韻字と用ふへし漢和ハ漢ハ和ハ韻

万句 千句 十百韻

支考曰連俳の一巻といふ
ハ百韻と数の限りあり

十巻とさぬれば千句といひ、百巻とさぬれば万句といふ
十百韻と千句の差別ハ一座と十座のちがひやく去嫌の
用捨あり

百韻

表八句 七句 裏十四句 九句 目月 二の裏十四句 三の折
十句 目月 二の裏十四句 三の折

二の表裏
ふたなりし名残の表 三の表 同裏八句 七句 支考曰
四のひきとつとく、名残の折といふなり、

米字

表八句 七句 裏十二句 七句 目月 二の表 目月 二の裏十二句 初
小同 三の表十二句 二の表 三の裏十二句 二の裏 名残の表十二句

三の表 同裏
小同 八句 七句 目月
支考曰七十二候といハ百韻と三折

七十二候

あられ 三花 五月 うち 其名 易
表八句 七句 目月 裏十二句
ハ七十二氣候とくともなり、

月 二の裏十二句 初裏 名残の表十二句 二の表 同裏八句 七句
○青藍云、易と周易六十四卦の數とくともなり、

源氏

支考曰源氏といハ三折あり、さハ哥仙の變數
して中頃の名目あり、其名ハ源氏の六十

帖ふあり、○哥仙三十六句ハ二の折二十

五十韻

四句とくとも六十句とも、花月の定座同
百韻の二の裏迄を
支考曰四十四ハ五十韻の變

四十四

ろと五十韻とも、
あせりハ其日其夜の時宜と見合せ、或ハ縮め或ハ延して
一座の首尾と作るべきとあり、其名ハ四十四とくともハ

例のハ俗習とくとも、称せハ
祝言のひきとくとも、
歌仙
表六句 七句 目月 裏十二句
七句 目月 名残の表十二句

同裏六句 七句 目月 支考曰哥仙ハ名目の風流也、ハ

十八番の哥合より、その讀人と哥仙といふハ、愛ハ上
下の句と合せて、三十
六吟の名とあせり、
長哥行
表八句 七句 目月 裏十二句
九句 目月 名残の表十二句

目月 同裏
短哥行
表四句 七句 目月 裏八句 七句 目月 初月 名残の
表八句 七句 目月 同裏四句 三句 目月 〇長

哥行ハ短哥行ハ求韻の俳諧の爲と例の支考ハ新
製あり、その辨ハ東花式 及び 和漢文操求韻の序ハ

十八公

表十句 九句 目月 裏八句 七句 目月 〇十八公とい
千歳不愛の松と表りて數とあり、
首尾

表六句 目月 裏六句 目花 の支考云首尾の吟ハ一座の時
宜あり或ハ奉納の諸願を祝し或ハ歲暮歲旦の賀しを
始終とてそのつる意ありと云ハ六とハ八とも

表合

表裏の首尾と合せ月花二座模倣すべし

八句 七句 目月 西華集 支考 凡例ニ云此表ハ神祇の二教

あり意無常と云らまハ名所と云ハ人の名と云ハ二卷の
始終と云ふつゝ心あり **湖東問答** 去来云去秋考

爰ハ旅寐して卯七と表合あり我ハ諾て曰凡表合ホの
非諾ハ尋常の式と替ふべし表の内ハ一卷の姿とて

去来をもむむうち用ふべき事ありと云ハ一段
面白く云へと答ぬニ子

發句

諸抄云一座の巻頭

あれハ宗匠貴人老

人の外あるべしと云ハ切字の道理ハ切字の条ハ注せ
心まのつらむびと云ハ切字の道理ハ切字の条ハ注せ

脇句

發句の時節と違へもとの餘情といふべし
發句神釈意無常時宜迷懷あれハ脇句も同

云韻とてあそめて留る事あきつゝもあそむと切者の業

あそむと初心のまゝと云ふと云ハいふと云ふと云ふ

あそむと故と明とて青藍按ずるハ脇ハ哥の下の句ハ
して上の姿と云ハ結ぶと正格と云ハ但ハ發句脇句ハ脇句ハ

脇句ハ體と失ふと云ハ初心のまゝと云ふと云ふと云ふ
脇句ハ體と失ふと云ハ初心のまゝと云ふと云ふと云ふ

脇句ハ體と失ふと云ハ初心のまゝと云ふと云ふと云ふ
脇句ハ體と失ふと云ハ初心のまゝと云ふと云ふと云ふ

脇句ハ體と失ふと云ハ初心のまゝと云ふと云ふと云ふ
脇句ハ體と失ふと云ハ初心のまゝと云ふと云ふと云ふ

脇句ハ體と失ふと云ハ初心のまゝと云ふと云ふと云ふ
脇句ハ體と失ふと云ハ初心のまゝと云ふと云ふと云ふ

脇句ハ體と失ふと云ハ初心のまゝと云ふと云ふと云ふ
脇句ハ體と失ふと云ハ初心のまゝと云ふと云ふと云ふ

脇句ハ體と失ふと云ハ初心のまゝと云ふと云ふと云ふ
脇句ハ體と失ふと云ハ初心のまゝと云ふと云ふと云ふ

脇句ハ體と失ふと云ハ初心のまゝと云ふと云ふと云ふ
脇句ハ體と失ふと云ハ初心のまゝと云ふと云ふと云ふ

脇句ハ體と失ふと云ハ初心のまゝと云ふと云ふと云ふ
脇句ハ體と失ふと云ハ初心のまゝと云ふと云ふと云ふ

第三

爰小旅寐して卯七と表合あり、我小諾て曰ん表合ホの
非諾ハ尋常の式と替るべし表の内ハ一卷の姿とて
去嫌をもむむうち用ふまじき事ありとて、一段
面白くくく答ぬニ子
發句 諸抄云一座の巻頭
あれば宗匠貴人老
よて翁ふ聞かざるを思

人の外あるべしむ句の体伸くと和く、詞やまらふ
心まのうらむびへ、云切字の道理ハ切字の条小注を
發句の時節と違へも、その餘情といふべし、
脇句 發句神釈意無常時宜速懷あれば脇句も同
くくそのけらひあふべし、發句難あはば脇も難なり、諸抄
云韻とてあてて留る事あきあきむあはれと、切者の業

あまむ、初心のまゝとあはれと、云いまいあまの
あてとの故と明さむ、青藍按ずるハ脇ハ哥の下の句ハ
して上の姿とつけ結ぶを正格とす、但し發句脇句ハ假らば
意と結ぶさると未練なりててあては留る時ハ意残りて
脇句の体と失ふあり、初心のまゝとあはれとといふ
むたといふ故とあらむとも、文字より留る時ハ太りと
意切て脇句の体と失ふまじハ字留ありといふであら
へしてあてて留る例といふハ續康栗たび人と我名
よむべし初時雨芭蕉又山茶花と病々ありて由之冬
の目霜月や鶴の行ふあらびあふ荷兮冬の朝日は哀
ありたり芭蕉曠野いづくの名もむつりや
春の草荷兮打もて蝶の夢とある、芭蕉
諸抄云文高く脇句ハ轉ずるといふことと云句がらひあは
ハオ三の本意小わらむ第三ハて留ハ留ハ留のさふ
ふにまじりてこれもその故と明さむ青藍按ずるハ
發句の姿ハ轉せしめんとあ意と残して下句ハ及む
とオ三の格とてあはれ其故とあらむとてあはれむと
あて下と結ぶまじハ大と意残つとてオ三の体と失ふ

第三

冬の
日

朝顔の巻

出ふなり芭蕉
猿蓑
才
雲雀鳴小田ふ上りこゝろあや

四句目

ふりりとよまねるる翁の句ハ、發句不似と
とも、意の切ぬと以オ三の体とせり准へてふべし
諸抄ニ云ありたりとての如く、と留まらず、ふらふら
わらふべし云云とも其故と明さば、青藍按ざるふ意
と残し四句目ふ及むとオ三の体とての意と受け結
ぶと四句目の格とも、故の作意と求めざるふ意とす

月花定座の心得

去來五花不定座
先師芭蕉給ふ當流ま

る」と用ゝ花と引上るふ二品あり一ハ一座ふ賞翫主人
き人ありて其人ふ花と望むとも、其人の句前ふ至り春

季と出して花と望むあり。是と呼出しの花のふに
つゝ貴人功者の人他譲るべき人なり。呼出しを
待む花と作る。又雨吟の時互ふ二本つの句なれば
辞退し及む引上て作る。故めれ。呼出しハ
呼出を者の過りて花の罰あり。下畧。青藍
云。月花ハ二卷の飭りて定座あり。月花ハ折端
合の辞義よりづりて後れ。時賞翫の月花と折端
へい。故折端前の高句よりて定座。例ハ其
故と知るときハ月花の座より。二卷の變化
ハ自在あり。但し月ハ折端へ。例あり。月ハ前ハ
月の障りて止事と得られ。月ハ前ハ
あり。花ハ。例あり。

去嫌大意

貞享式
云去

去嫌大意

貞皇武
云去

卷之六

嫌とハ、天象地形より、草木鳥獸も、器財食服も、目
みくら耳ふひぐりりのハ、見こくらふ遠慮のふれど

人の制せざると我と用捨はるるべからず云云

是と我門の一理万通といふ抑俳諧の式へ楚仙乃無
言抄ふ濫觴て貞徳の御傘ふひりまりふれどおも
連哥の家ふあふふ應安の新式と鑄形とあせり

神我慈魚常迷懷懷旧名
所同字病体人名亦嫌云

と諸抄云々云々青藍云病体人名嫌ふといふ云々

行陣とて冬の日ノ月影
 夕塞三オ西行が軍法をのり小

不利休々家を鼻ふのけ
 夕塞 オ西行が軍法をのう小
 夜ふけて云の作例あり按むる小風雅小富る古人の名

表のうらうらとくつてあぶし聞ゆふふふとむし

権兵衛八兵衛のツレ
曠野ユウ 填注ツ

くまの病体ありとも源氏物語

[illegible]

三句より五句まで、二句をハ捨ても、春秋ハ

春秋
景物多々をあり○春と春秋と秋と去し

一句より三句まで、三句より多くは甚だ

冬ハ景物少クそれをも○夏と夏冬と冬也

句去
申あき込
一句あきぬらう一も二も三句より多くは

あり、神祇
せす、○神祇と神祇三句去来、

澤女さわめ
神祇しんぎ
木き
一いち

新方
同じ、
達情無常
心之迷情と無常

と引合せてハ三句もあつてあり無常むうりハ三句だけ

す、述懐も同じ、○述懐と述懐、無常と無常と云ふ、

二句より五句までつく、一句を捨てる、
三句、四句、五句、六句、七句、八句、九句、十句、十一句、十二句、十三句、十四句、十五句、十六句、十七句、十八句、十九句、二十句、二十一句、二十二句、二十三句、二十四句、二十五句、二十六句、二十七句、二十八句、二十九句、三十句、三十一句、三十二句、三十三句、三十四句、三十五句、三十六句、三十七句、三十八句、三十九句、四十句、四十一句、四十二句、四十三句、四十四句、四十五句、四十六句、四十七句、四十八句、四十九句、五十句、五十一句、五十二句、五十三句、五十四句、五十五句、五十六句、五十七句、五十八句、五十九句、六十句、六十一句、六十二句、六十三句、六十四句、六十五句、六十六句、六十七句、六十八句、六十九句、七十句、七十一句、七十二句、七十三句、七十四句、七十五句、七十六句、七十七句、七十八句、七十九句、八十句、八十一句、八十二句、八十三句、八十四句、八十五句、八十六句、八十七句、八十八句、八十九句、九十句、九十一句、九十二句、九十三句、九十四句、九十五句、九十六句、九十七句、九十八句、九十九句、百句、

戀と恋三句去し今去といふ後の執心

一句もたふくくも三句も
人
山類
一

水邊同じ人倫

雜

二句より多く、○人倫 **居所** 一句より多く、三句より多く、
と人倫、二句より多く、
く○居所と居所、二句より

ふ **旅休** 上ふ **夜分** 上ふ **生類** 二句より多く、
同じ、
出と獸、魚と鳥

の如く、變じて二句より多く、出と虫、
獸と獸、鳥と鳥と三句より多く、
植物 二句より多く、
二句より多く、

木と木、草と草、三句より多く、
木と草と變じて二句より多く、
名所、國の名 二句より多く、
二句より多く、○衣類
と衣類、三句より多く、

○名所と名所、國の名と
名所と變じて二句より多く、
衣類 二句より多く、
二句より多く、○衣類
と衣類、三句より多く、

降物 二句より多く、つづけて雪雨と多く、
二句より多く、○降物と降物、二句より多く、
從軍物 二句より多く、

上ふ **天象** 上ふ **食類** 二句より多く、
同じ、
食類、三句より多く、飲食と多く、

二句より多く、
時分 二句より多く、
夕時分と朝時分、打越をきく、
二句より多く、○火体と
火体、三句より多く、凡体同断、
支休 二句より多く、

火体、風体 二句より多く、
火体、三句より多く、凡体同断、
支休 二句より多く、

去 **二句去** 車、馬、舟、頂、小、間、折。生類は添水、紫山、
子、鳴子。雨、露。手、小、袂、襪。偽、小、

誠。月、小、朔、日、二日の日の字。月、小、日、星。今、小、け、小、の
た、小、枝、拳、小、違、わ、る、も、一、理、万、通、と、以、て、餘、ハ、准、へ、る、

三句去 同字。月、小、月、次、の、月。正、花、小、草、木、の
花。竹、小、竹、田。風、小、木、の、字、餘、ハ、准、へ、

五句去 同季。霞。田。竹。月。
涙。夢。枕。煙。船。路

七句去 季節の跨物
後の彼岸、逆
の彼岸入と断ら

載入、出替、彼岸、峯入 後の彼岸、逆
の彼岸入と断ら

白、瑠璃、鳥、鷓、鴒、鷓、鴒、目、白、鳥、類
春秋の季、小、つづけて、ハ、
帰、来、の、二、字、と、断、ら、る、

其時其季 白、瑠璃、鳥、鷓、鴒、鷓、鴒、目、白、鳥、類
春秋の季、小、つづけて、ハ、
帰、来、の、二、字、と、断、ら、る、

其時其季 白、瑠璃、鳥、鷓、鴒、鷓、鴒、目、白、鳥、類
春秋の季、小、つづけて、ハ、
帰、来、の、二、字、と、断、ら、る、

其時其季 白、瑠璃、鳥、鷓、鴒、鷓、鴒、目、白、鳥、類
春秋の季、小、つづけて、ハ、
帰、来、の、二、字、と、断、ら、る、

其時其季 白、瑠璃、鳥、鷓、鴒、鷓、鴒、目、白、鳥、類
春秋の季、小、つづけて、ハ、
帰、来、の、二、字、と、断、ら、る、

山雀、日雀、四十雀

この類ハ秋のこゝに耳をこめれば、啼きとも行とも断

駒鳥

春ふれと度るものい、秋の暮と定む

鰕

秋の一字と断れども、秋の暮と定む

野遊

春ハ摘菜の遊びより、秋ハ草狩の奥ありて、決て春秋の二季

鶉飼

鶉舟ハ桃の節供ふとありて、菊の節供ふ終りゆれども、鶉舟ハ春の氣を

節供

何の節供と断れども、春夏

鮎、菜

鮎ハ上下の字と断れども、鮎ハ若くとも、落るものい、鮎ハ

祭

鷹

四季ふとる物ハ祭ハ鷹の類あれども、鷹ハ其季の名目として、四季の差別とあせども

俳諧ハ多用あれども、其名目と断るハ及ぶと、其の季ハついでて、決て四季ハ用へし、以上貞亨式より抄出

古法可有取捨事

杜鵑、深見草

柳、櫻、鶯、螢、杜若、芭蕉、蝸

牛、鵲、鵲

此十品ハ象物の數量あり、古抄ハ此類と音訓ハ替異名ハ呼でハ三ツと

定めたり、古今の取捨とハ此謂あり、右十品の名目と

舉て、万物万象の凡例とあせどもあり

去嫌可有斟酌事

父、母、男、女

此四品ハ人倫の凡例あり、主、誰、身、獨、媒

僧、寺

此五品ハ人倫の類あり、人倫と定て、指合とくともあり

居所ふ非むといとも今式き **親王** **皇女** **天童** **△**
ふハ指合さしあと縁べきなり、

天女 **△** **帝** **△** **御門** **△** **仙洞** **△** **新院** **△** **鬼** **△**

佛 **△** 此十品ハ古式ふ色々の説めども人倫ふ二
句づ去べきなり、御門ハ居所ハ三句去べき

若菜 **△** **郭公** **△** **松虫** **△** **水仙** **△** **水鶏** **△**

三日月 **△** **尾上** **△** 此七品ハ會意の名目ぞ失して
二ハ有べきなり、とあり、會意ハ

二字三字の意と會うてその名と作る **雪** **△** **雨** **△**

故あり字と造まる六書の一名あり **虫** **△** **魚** **△**

馬車 **△** **飯** **△** **餅** **△** **茶** **△** **酒** **△** 此八品ハ日用の物
あれば座ハ二ツ

有 **△** **松** **△** **子** **△** **日** **△** **月** **△** **更科** **△** **花** **△**

芳野 **△** 此三品ハ連哥の沙汰ハ
一と非諧の家ハ論多し **鐘** **△** **鉄** **△** **醬** **△**

爪木 **△** **妻** **△** **敷** **△** **木** **△** **篠** **△** **佐** **△** **羅** **△**

翠簾 **△** **菖** **△** **水邊** **△** **山伏** **△** **山類** **△** **夜** **△**

分 **△** 此七品ハ古式の嫌ハ物あれ
ど今式ハこの沙汰あり **閑** **△** **伽** **△** **筵** **△** **火** **△**

轉寝 **△** **眠** **△** **の字** **△** **起** **△** **の字** **△** **虫** **△** **砧** **△**

此八品と古式ハ夜分と定められとも今
式ハ夜分の意ありて指合と縁ふなり **冠** **△**

烏帽子 **△** **綿** **△** **木棉** **△** **夕立** **△** **雲** **△**

雨 **△** **笠** **△** **鷹** **△** **鳥** **△** **狩** **△** 此五品ハ古式ハ附句ハ嫌
なりとあれども今式ハ

彌生 **△** **師走** **△** 此二品ハ古式ハ
も異名の月を

古今の違あり

若菜△郭公△松虫△水仙△水鏡△

三日月△尾上此七品ハ會意の名目で決して
ニツハ有べうゝむとあり會意ハ

二字三字の意と會めてその名を作る
故あり入字と造まる六書の一名あり
雪△雨

古式ハ此二品ハ雪四ツ雨二とあれども
名類ありとむ雨と四ツあれどもし
虫△魚△

馬△車△飯△饅△茶△酒
此八品ハ日用の物
あれゞ座ハ二ツツ

有△松△子の日△月△更科△花△

芳野此三品ハ連哥の沙汰ハ
一と非諧の家論あり鐘△鉄△醬△

爪木△妻△敷△木△篠△佐△羅

翠△簾△菖△水△邊△山△伏△山△類△夜

分此七品ハ古式の嫌ハ物あれ
ど今式ハこの沙汰あり閑△伽△筵△火

轉△寢△眠△の△字△起△の△字△虫△砧

此八品と古式ハ夜分と定められども今
式ハ夜分の意ありて指合と繰りかへる
冠△

烏△帽△子△綿△木△棉△夕△立△雲△

雨△笠△鷹△鳥△狩
此五品ハ古式ハ附句△嫌
るものとあれども今式ハ

嫌△へ△總△
古今の違あり△彌△生△師△走
此二品ハ古式ハ
も異名の月を

羅

嫌ひて重し何とて二品の差別あり也花ハ三春の艶といひ紅葉ハ三秋の色といひて櫻と楓ハ其体あり花や紅葉ハ其用ありこの故に花ハ櫻ふあらず櫻ふあらずもわくもどく我門の正花論ありとや爰に論せし櫻も楓も花と紅葉ハ面とさうく只一ツありとや異体ハ例の數とさうめど

千句有一物之事
△鬼 △虎 △龍 △

女
此四品ハ連俳の差別あり新式の一座一句とある所ハ凡五十余名あれども多くハ連哥の用と

して俳諧ハ不用あり鬼味噌といひ龍門といふ異体ハ例の數とさうめど

花鳥有二物之事
△柳 △櫻 △鴈

△燕 △鶯 △菊 △千鳥
此七品ハ古式より一座一句の物あり

ととも花鳥の二品ハ四花八月の賞翫に敘ひく一座ハ二句づ有べきとあり花鳥の名ハ代々考へし

指合可有分別事 △あそとあり △

頃とあり△ふとあり△てとあり

古式ふ大事とあれど、
今式ふハ子細あり、
△老^{おい} △親^{おや}子^こ
此二品と古式ふ
述懐と成せり、

今式より分別
△鳴子^{あやこ}
△網^{あみ}
△花鳥^{もとり}の繪^え
△花

小櫻ことうへ楓かえ小紅葉こもみぢ
古式はハ鳴子ハ稻を守る故、
植物は二刀去るハ多意

のこひふくこまハ分別は及ぶを以て生類ハ二句去べし。納ふ魚鳥と二句去の例あり。或ハ草木鳥獸の絵ハ其季く^くと持あう。生類植物ハ嫌をどとやまう。雑とあまハ論あう。季と持ハ二句て去べき也。これハ絲の月^{うづ}喻の花の例あり。凡雅の賞詠とあせる花のみちの二品と櫻と花ハ面とほりて輕く^{かろ}楓と紅葉ハ折と

嫌ひて重し何とて二品の差別ありや。花ハ三春の艶といひ、紅葉ハ三秋の色と云ひて、櫻と楓ハ其体あり、花と紅葉ハ其用あり、この故ニ花ハ櫻ニあらず、櫻ハ楓ニあらず。わがわがもてハ我門の正花論ありとや、爰ニ論せ、櫻も楓も花と紅葉ハ一面と云々、只一ツのさへきや、異体ハ例の數と云々ぞめど。

千句有一物之事
△鬼 △虎 △龍 △

此四品ハ連俳の差別あり、新式の一座一句より
所ふ、凡五十余名あれども、多くハ連哥の用ゝ
して、俳諧ハ不用あり、鬼味噌といひ
龍門といふ異体ハ例の數とさざりども

花鳥有二物之事
△柳 △櫻 △鴈

△燕 △鶯 △菊 △千鳥
此七品ハ古式より
一座一匂の物ナ

まどと花鳥の二品ハ四月の賞翫あはれふ效なりひく一
座ふ二句づ有あべきともあり花鳥の名ハ代々考べし

の凡例より此段の註用ハ二色ありき異体ハ只一ツにて
二ツあるよりき同体ハ二とあせし
二ツ一意の用をもちふべきあり

日用可輕物之事 △昔 △曉 △庭

△垣 △袖 △襟 △湯 △汁 △文 △使

此十品ハ古式ハ一ツ二ツとあれ
ど折といひ替てハ四もあるべし
△照 △曇 △泣

△笑 △植 △荇 △眠 △覺 △起 △居

品ハ日用ハ多用あれハ面と替
てハ七ツもハツもあるべし
△目 △鼻 △耳

△口 △手 △足 此六品ハ支体の幹よりして諸
の用多けしむ折と替て四ツ

有り
有り

尤可不審旋之事 △老 △福神 △

親子 元中古の式目と論をふ第一連排の用と
不用とをもちふべし連哥ハ艶詞のあを

学びオハ二意の理窟とをいひて滑稽言ハ談笑の和
とをもちふべし今ハ俳諧の扱ひとハ雲泥のちがひある

事ありとれが中めと不審とをさし込ハ老と述懐とを
表ハ句ふ嫌へと福の神ハ嫌とをいふとハ彼のハ理

窟あらめと命の字とをて述懐とあり親子と
述懐とありハ何故ハ死あり

稻妻 △電光 △鳥鵲の橋 △龍 △民

の龍 古式ハ稻妻電光と天象ハ嫌とをいふハ鳥
鵲の橋と生類ハありとを龍と生類ハ嫌

△冬牡丹 △冬椿 △冬梅 △紅梅 △

緋桃 △梅櫻の紅葉 △山吹 △郭公

此八品ハ花鳥の中かと只一句きて二句ハあるものなり
の凡例なり此段の詮用ハ二句あるべき異体ハ只一にて
二句あるべき同体ハ二とあせり
二句一意の用をあらわすべきあり

日用可輕物之事 △昔 △曉 △庭

△垣 △袖 △襟 △湯 △汁 △文 △使

此十品ハ古式は一ノ二とあれ
と折といひ替てハ四もある

△笑 △植 △荊 △眠 △覺 △起 △居

品ハ日用ハ多用あれハ面と替
てハ七つもハツもある

△口 △手 △足 此六品ハ支体の幹なりとて諸
の用多しとて折と替て四も

有り

尤可不審旋之事 △老 △福神 △

親子 元中古の式目と論ぜらる第一連俳の用と
不用とをさすへで連哥は艶詞のあをを

字びオハ意の理窟とていひて滑稽言ハ談笑の和
とあらはるなり今この俳諧の扱ひハ雲泥のちがひある
事ありとれが中ふと不審とてさだハ老と述懐とを
表ハ句ふ嫌へと福の神ハ嫌とて色とるハ彼の理
窟あらはれ命の字とて述懐とあり親子と
つてハ述懐あらはれ何故ハ死なり

稻妻 △電光 △烏鵲の橋 △龍 △民

の龍 古式ハ稻妻電光と天象ハ嫌とてハ鳥
鵲の橋と生類はあらはれ龍と生類ハ嫌

櫻人詠ふ春の季と持て植物は三句より入倫も二句さるより同三品の詠物は三色のちひあつてもかゝる三別の道理ありとも道は一貫の日あつても今式より去嫌ハ一
△泪の露 △泪の雨 △青楓 △
例々々々

榎鳥

泪の露ハ降物なりて泪の雨ハ降物もあらずとて御今の細数も不審なり青楓と秋といふ察もふ姿情のさひあらん青の字はさう秋の姿はむらと楓はさう紅葉の体あるを若楓の下とさう若楓ハ夏ありといひて青楓もあらずとて所ふ雨注のちひあつても不審の不審とやいふ榎鳥と雜とさうと掠鳥ハ勿論とて菱喰ハ豆さうとさうの実と好める名あらん論とて秋といふ

曾不及論物之事

△雪ハ霰 △椿

小花 △蓮ハ實

御今ハ雪ハ霰ハ附句と嫌ハ椿ハ雜あり花と結ひと

春あり蓮の実ハ夏あり蓮ハ花とあり実を結ぶ物ありといふこと今今式ハ曾て論あり

右古式とむく蕉門一派の確論とむく蕉翁の授記と貞享式ハ載りて其大畧を記す

の本書ハ委々議論あれは徒てさうすこの

外の去嫌ハ御今 芋環 通俗志 等ハむづ

畧

を

指合

貞享式と合とてふことその同字

き耳ふりてゑのあり数字ハ送字も旧式より輕

ことハ一五ハ山ひとつのてき語路の拍子の耳ふり

りるハ二以下ハ決してさうむ余ハ二理

万通と以て准へ知るべし但し初心のさうありと古

雜

むとも武の竈ハ居所ハわらむとて今式の不審
のまふ用ふべき也但し今式の道理ハまふせて嫌之

△青柳 △菰 △櫻人 古式は青柳詠ハ
春うして植物ハわら

むとも菰詠ハ秋ハわらむと生類ハむと冬ハ
櫻人詠ハ春の季と持て植物ハ三句より人倫ハ二

句より同三品の詠物ハ三色のまふむとて今式ハ
三別の道理ありとも道ハ一貫の日ありとも今式ハ

去嫌ハ二 △泪の露 △泪の雨 △青楓 △
例ハ二

榎鳥 泪の露ハ降物ありて泪の雨ハ降物ハわら
むとて今式ハ御今の細叙ハ不審あり青楓と

秋といふ察まふ姿情のまふむと青の字ハまふ
秋の姿ハわらむと楓ハまふ紅葉の体ありと若楓の

下とて今式ハ若楓ハ夏ありといひて青楓ハわらむと
雨所ハ雨注のちひありと不審の不審と也

いふ榎鳥と雜ハまふと掠鳥ハ勿論とて菱喰ハ豆
まふと也との実と好む名ありとハ論あり秋といふ

曾不及論物之事 △雪 △霰 △椿

小花 △蓮 △小實 御今ハ雪ハ霰ハ附句と嫌ハ
む椿ハ雜あり花と結むと

春あり蓮の実ハ夏あり蓮ハ花より実を結ぶ
物ありといふと今式ハ曾て論あり

右古式とむと蕉門一派の確論とむと蕉翁の
授記と貞享式ハ載あり其大畧と記と

の本書ハ委々議論あれは往て今式ハ
外の去嫌ハ御今 芋環 通俗志 等ハわらむ

畧

指合 貞享式と合とて今式ハ同字

き耳ありと名あり数字ハ送字ハ旧式より輕
ことハ一盃ハ山ハ一のとき語路の拍子の耳あり
りるハ二以下ハ決てとて今式ハ余ハ二理
万通とて准へ知るべし但し初心のまふと古

式みわけしる

と左ふ抄出ス

いづ

二三〇折と替べしり
うちとひつゝ五文

物とまふあふあぞいうふい

一ツの物
俳ハ二ツ

といひうろく二ツ去をり

まゐいゑせん

一ツ〇上の五文字ふかく字あり
いうせん留るふかく字あり以上

ニツの内今二ツ

いふいう

三ツ
はいな

の内あふべし

し

上ツ下ツづれると今
一ツくも二ツ三ツをり

七ツ去
むろろ

とむ

濁音三
夕去

小ふとあり

上ツの小留ハ三ツ
去下ツの小あり

ハ一座二ツの物とま且あふひありといへり青藍格も

ふ上ツの意とつけ結ふと下ツの格とをさるるをならひ

あふふとてあふまれど意残りて下ツ
の格とあふむ故はあふひありといふ

ふとあり
あふといふ詞きりり
折合もろろ

ふとあり
あふといふ詞きりり
折合もろろ

ふとあり
あふといふ詞きりり
折合もろろ

句去
ぬぬとぬ
もんぬとろんぬハ二ツ去
もんぬとふのぬハきりり

但し折合
ぬるとぬる
二ツ
ぬるとぬら

ときりり
七ツ去ありぬらんとま
三ツ句もをり

ん
る
二ツ去あり
三ツ句もをり

る
る
二ツ去あり
三ツ句もをり

る
る
二ツ去あり
三ツ句もをり

る
る
二ツ去あり
三ツ句もをり

る
る
二ツ去あり
三ツ句もをり

る
る
二ツ去あり
三ツ句もをり

る
る
二ツ去あり
三ツ句もをり

る
る
二ツ去あり
三ツ句もをり

る
る
二ツ去あり
三ツ句もをり

る
る
二ツ去あり
三ツ句もをり

る
る
二ツ去あり
三ツ句もをり

る
る
二ツ去あり
三ツ句もをり

る
る
二ツ去あり
三ツ句もをり

七句去あり一座 **何の字、幾の字** 附タと嫌
三ツとあるを

きり **あづら** 五ウ去
あり **ふ** 物ふぢひそのふかに
又つきせふふのあり

皆ニウ **ら** 去あり **らーとらー** **らんとら**

ん ニウ
去 **らんあん等** のうりたる一字をねえ
留りふハニウ去ありとあ

アとわらひに附て
もろろろろろ **うち** 打霞打つづ
の類ニウ云 **や**

や 折合と嫌ふ疑
いのやハニウ去 **ま** 折とぎらふてまり
あうねハニウ去

け **けらじ、けき** 皆ニウ
去あり **けア** 一ウ去
青藍云

けりとありの文字打越と嫌ふこと
と縁の下まで和日あり **けし** 生鯛あつふ浦の春ふ此村
の廣きふ醫者
のなうりたり

けし あづけーホの
詞面ときらふ **し** わけ、咲け
の下知ニウ

づいざい、**か** 発句の外は願のづゐゐる今や
多くいせむ、**か** はるありとよりあうぬがづつ

まゝぶ、**か** ニウ ころごひの
あり、**か** 去ニウ 去ニウ 去ニウ
よ せよし
よの下

知或はめでこさよまじ
さよの類、二句去あり、**れ** 下知のレニ
そ 去ニウ 去ニウ

ぞとぞ ニウ 去ニウ
つ 折とく
つ 三ツと

まゝいづと
つハニウ去、**な** ニウ ありふ
な 去ニウ

ある、あれ、あれや、あらじ、ならん

皆附与
と嫌ふ、**ありふ** 成の字の意あらふ附
な 成の字の意あらふ附

アふア 並びるも打越るも嫌ふ
盛り御室の路の人通ア 深川集花

野ハ錦あり 作例多し
あれや、なまし、なまし

七句去あり一座 何の字、幾の字
三ツとわるを 附与と嫌

きり 五ウ去
あづら 物ふかりひそのふかりに
あ 又つきせふふのありに

皆ニウ のうりゐる一字をねえ
ら 留りハニウ去ありとあ
らん、あん等

アありみ附て 打霞打つ
もろろろろ の類ニウ
う や

や 折合と嫌ふ疑
いのやハニウ去 折とく
ま あふハニウ去

け 皆ニウ
けらじ、けき 去ニウ
けア 一ウ去

けりとありの文字打越と嫌ふ ひろこちあらん
と椽の下まで和日あり 生鯛あつ浦ハ春ふ此村

の廣きふ醫者 あづけー木のけ
けし 詞面をきらふ
け の下知ニウ

の廣きふ醫者 あづけー木のけ
けし 詞面をきらふ
け の下知ニウ

の廣きふ醫者 あづけー木のけ
けし 詞面をきらふ
け の下知ニウ

志

過去の〜と現在の〜と付ての〜と嫌ふ

志と海と

清濁うりとも二句去あり、
の腰小折合てとるまじと嫌ふ

志

て留る

九の物に志

惑しきとひしきの類、二句去ありと

も

中ねー留る

下句の内一と二と中、
出ろふ折と替以上三ツ

世

せんといふ詞ふするといふ詞

二句去あり、
するといふ

せんと見

おれどい

すすとず

ちりどきぞの類二句去

別吟

別吟といふと難波は波、大和は、大紫は筑紫のこひ、是と同字別吟といふ附夕と嫌ふ

折合

御今折合といふと下の中小花を見んとて山ふ入

あうといふ句ふて留の上の夕と附を又前夕は上夕ふ秋の夜の明をうつるまで月とてといふ句ふ、涙ふれて

あゝ腰の折合ふて文字をとまへうとてといふ義あり、
ての字ふ限らるゝ文字ふ文字をね字皆同前して

まてすこゝあゝくけてふえあゝとて留ふ嫌はん夫も捨て果てあゝい、てり

附くるはきくらふあり

正花之事

花ハ往古ハ三本ありしを 勅許ありて宗祇よりあて名残の花あり

名残の花と添て百韻小四ツとてといへり芭蕉翁云
我家の正花論ハ花ハ櫻ハあらま、櫻ハわらるる也

上句にて留三句去あり下句のてこみふ
とふふ同じふ文字の条に注しあり、

As. - m. c. m. s.
S. - d. - m. c. m. s.

色ありの類あり

志

過去の——と過去の——ニウキあり、現在の——同じ過去の——と現在の——と付てもう一つ——

志

世

二夕去あり
すゝとすゑ

別吟

折合

御今折合といふを下の中ふ花を見んとて山ふ入

あふふふ句ふで留の上の夕を附を又前夕は上夕ふ
秋の夜は明を待つるまで月とてとふふ句ふ涙ふれて

ふと、腰の折合ふて文字をまへうもとのふ義あり
ての字に限らむと文字の文字を収字皆同明して

まてすこあひくけてふえあうさうて留小嫌せん夫も
捨て果てやうくてり

附くるハきくらゝあり

花ハ往古ハ三本ありしを 勅許あ
つて宗祇よりあて名残の花なり、

名残の花と添て百韻ふ四ッゝとといへり、芭蕉翁云
我家の正花論はハハ花ハ櫻子あらまど、櫻子わらざるや

ふとわらど 宇陀法師

詩六

花と櫻と思ふ作者

り唐詩の花ハ牡丹あり、吾朝詩奇の花ハ櫻あり連俳の花ハ櫻ありわらど牡丹あり花ハ貴訖の惣名と任まされば花ハ櫻付る事あり何ぞ花の句櫻あらむ、花ハ櫻つる事あり茶の出花藍の出花正花とてと先師蕉申されき猿蓑の俳諧名残の花ハ櫻あり、これを見誤る正花ハ櫻とて人もあつけり櫻正花ありわらど初心とてことあるも口傳あり云

春の正花

花ハ杜鵑

古式夏とて貞享式今按むるハ漢家の

詩ハ杜鵑とも蜀魂といひて暮春の景物ありハ幸ふ其例と假して暮春の用とあてべきや、本よマ驚の巢ハ結むハ決して春と定むべし云、心の花 春のはの部花心の条ハ注を詞の

夏の正花

若葉の花

貞享式今按むるハ月花ハ凡雅ハ一巻の

飾ありハ踏むる物ハ加減して四季と自由ハ配ふべし若葉ハ花と結びてハ決して夏と定むべし云、残る花 夏のハ部 餘花 夏のよハ部ハ注を、秋の

正花

花ハ火

夜分

花ハ相撲

植物

花ハ燈

龍

夜分ありハ植物ハあり

冬ハ正花

歸花、餅花

植物ハ二句去あり

雑ハ正花

一書ハハ雑の花ハ花前ハ至て夏冬の季出く時

花を附る用とてハされど次の附句ハ春季とやあるハ例ハ花と重くハ蕉門の捌あり云、青藍云蕉翁のくそられらるハハ好むまき人の俳諧ハハ雑の正花とてハハ好むまき

事ハ

作ハ花

植物ハ二句去あり

花ハ塗

漆の事あり

花ハ

ういらき

鞘敷ハ模

茶の花ハ香

食類あり植物ハ嫌

人倫にんりん燈火とうかの花はな植物しょくぶつふあらはな
 更さら花はなあり、花形はながた小鼓ここよりあり、植うゑ花はな子こ狂言きやうげん
 金類きんるい

詞心集

直隸

我家不讀書也

續意の讀
 まゝて文字をいふに古抄の如く
 一字より嫁と娘とと野老僧城の名目とを
 當時句の意の安情ふまゝに例の詞と意とを此
 ちふは他門より意と一句をし捨るといふ方外の沙
 汰あるより意は陰陽の道理ふまゝ三句より五句
 時ふまゝのて意と一句をし捨まゝ故なり云々○
 支考云意の一条は合式の大事すて意は一句をし
 捨まゝき陰陽の理のふまゝにその外は未然不定
 るとあらん其故いふふまゝに詞の意は字をぬく

心の意、向ふある故、その時その向ふは、
 句情、兼てなるなり、此頃の附句は、普請
 場の飯も一度不起、といふ、常の先、その手拭
 といふ附句は、普請場の基所は、只今膳と居る、とい
 らの挨拶と掃き、起出る人も、折釘
 の手拭と常衣を、及び、越、中、大工木挽
 の、物、の世話、三句目の作者
 愛、行、越、の、と、轉、起、情、の、附、方、を
 棄、て、思、ふ、の、頭、に、傍、輩、中、の
 下、る、率、也、川、の、頭、
 前、向、の、作、者、の、意、の、後、の、眼、力、が、意、の、情、を、見、た、い、
 彼、我、の、二、句、の、意、を、求、て、二、句、の、
 ○青葉、三、葉、門、の、意、の、詞、を、定、め、る、の、
 向、の、三、葉、の、意、の、詞、を、定、め、る、の、
 作者、の、意、の、詞、を、定、め、る、の、
 詞、を、定、め、る、の、
 在、る、男、の、意、の、詞、を、定、め、る、の、

契

二六契

伊達

身

神祈

目

憂別

名

待

占

憂別

名

待

占

目

神祈

憂別

名

待

占

契

伊達

身

神祈

目

憂別

名

待

占

契

契

伊達

身

神祈

目

憂別

名

待

占

契

契

伊達

身

神祈

目

憂別

名

待

占

契

契

伊達

身

神祈

目

憂別

名

待

占

契

契

伊達

身

神祈

目

憂別

名

待

占

契

契

伊達

身

神祈

目

憂別

名

待

占

契

契

伊達

身

神祈

目

憂別

名

待

占

契

契

伊達

身

神祈

目

憂別

名

待

占

契

ありその木ハ一尺なりして、五色小彩りて、
詞花集 おひひふふ立初

錦木の千束ありて、
誓文、起請

男女子の神文
かきぬる香 女の心をいさめ
してちかきもの

香のおのづから重
肉陣 肉屏 **天室遺事** 揚國
ありて脱るもの 忠冬、月常小婢妻

の肥大ある者と前小行列て風と遮りて、
人の氣を藉て相暖む故ふことと肉陣といふ **後**

宮 禁闕中美人
の在所といふ **美人の名、美人と畫**

漢書 王牆字ハ昭君漢の元帝の官人也云 **西京**
雜記 元帝後宮既ふ多し常小見るとを得ど乃チ

画工として形と畫せしを畫と案してること幸とて
諸官人皆画工は賂を巧王昭君をも遂小見るとを

えむ匈奴朝小入て美人と求り、閼氏小せんとも爰ふ
於て上畵と案して昭君と以て行つゝ去小及んで

召て貌をくふ後宮才一とて帝よと悔ひ名
藉已小定る帝信と外國小重人を故ふこと人を

更む乃チ其事と窮案して画工と市小
棄つて漢書琴操小の説述小異と **返三覓**

香 李夫人ハ李延年の妹武帝の夫人あり返魂
香のこゝろハ世人のあふところを思ふを畧すと

空燒 薰物 留伽羅 袖の移る香 **化粧**
あせ置 枕香炉 ころり香

紅粉 白粉 凡紅 的 焦 眉 鐵樹

匂ひ袋 不二額 九額 密男

妹許ゆ 女のゆく **紅絹** 白陀羅尼 香の

ふれとくる糸匂ふ春の朝日小紅絹の水なりといふ
支考が服ありてこれ恋匂ふわくも匂体ふふある

夫 世ハ東國の方言 **夫婦** 男と女相互
ふ夫とてそのハ

雜

女房めぼう 女房、男房めぼうと宮人の称なり。今、
夫の妻をいふ女房めぼうあり。

外婦ぐわふ 房ばう 寢所あり閨中ハ、
宮中の小門あり。花街はなまち 遊里、乳
守の里、

室の津つみ 神崎、江口、大義、祇園町、
浅妻船、吉原の里、嶋原の里、新町の里、
吉目樓きちめう 妓門、
娼門、

浮身宿、同船、遊女うきよ うれ女、傀儡女、遊君、ある
妓家、揚屋、

辻君女郎、た 傾城けいせい 傾城、傾国ハ元美人の称
あり、誤て遊女とす、
禿かぶ

開卷一笑かいせん 了鬢妓りうぼん 鶉老うす 妓樓の
老女、紋日、水あ

げ、まひ付煙草、つけとし 飲うけり
酒と飲て

比翼ひよく 座ざ 忍しの び編笠あむらさ 原の里へ
むう、吉

かう入者、泥町どろまち 今の田の茶屋ふて編笠をとりてうり、
一、事ハ世人のちる所あれはいと種彦云ハ編笠

とくもむすめが家よりうりゆくと、
手編笠よりと手前編笠よりものへ、
曉金あきぎん 元禄
の頃

江戸吉原の花街中、後朝雨ふるとき、今と賣まり、
ことと曉今とつゝ五元集ごえんしふ 郭公ありき今とをせ

けり、
其角そのかく 七しち 八はち 瀧蕩たきどう 中て仁義礼智忠信孝悌
のハツと亡ふものなり名づく、
女

樂がく 舞姫、
白拍子、伽が やらう 江戸で舟饅頭大坂ふ
て伽やらう又ふりやう

とや 野郎やろう 色いろ 陰間かげま 男色とひき
子 飛子とびこ 旅たび 陰かげ 間ま

神媒しんばい 正室せいしつ 通と 路史ろし、女嶋、正姓、
紙戦婚同是、曰神媒、

切字きりじ 貞享式けいしやうしき ひうより切字の事ハ十八字の品
あり、和哥わが 中も連哥れんが 中との沙汰あれど

例の何ゆゑとこの故とあり、ハ童部どうぶの心経しんけい あり、
中々、自己ふ分別しつべつ あり、中々、中古の俳

諧かい、今いまの俳諧かいの姿やを、同体別用のことあり、

雑

ふしとて切字の用よりいふ物不對して差別の
 義あり、とまはし是ごとく時とてけて物に二つふま。故ふ
 始あり終ありて二つ一章の衆句とてあらはる九切字
 の品よりいふ或ハ一字の働あやの字一の字の類
 といふ或ハ餘韻の助字とてあらはる一の字一の字の類
 といふ其外ハ何誰とていふ裁末と治定まると迷
 悟と動けハ靜とていふ物ハ相對の道理よりいふ
 衆句の切とのといひて字と定むるふに及ぶと耶と
 うとび鳥とていふ裁末と治定まるといふ道理と
 ろる人ものつら衆句のさるあらはるいふ我家
 ふハ心切といふ中の切といふ挨拶切といふ名ありてと
 ハ心詞といふのさるハ性ある切字といふハ○青藍云切
 字ハ心と切といふ意と首尾とせんがとあらはるいふ
 へ定とて切字とあらはる心切首尾といふいふハ衆句
 あり、但し心とさるいふ下りふ例ハ何故やと
 及ぶとて平々の格も、例ハ何故やと
 この時とあらはるいふ作ふ自在の働有じ

中の切

猫の悲む時ばやの曉月
 虎くも出ていふと月雲

心の切

いふとて雪見ふらうふ所まで
 やうて死ぬけしきいふと。蟬の聲

挨拶切

世を旅ふ代りく小田の行度り
 人ハ家と買せて我ハ羊忘

二字切

君火くけよき物とて雪九け

三字切

子供らよ昼顔咲ぬ。瓜むる

二段切

夕も。朝も。つるを瓜の花
 空甕も。空也の瘦も。寒の内

三段切

梅。若菜。まう子の宿のころ汁。

とまはし

青とて有べき物と。唐とて
 米とて友と。今宵の月の客

わまはし

桐の木ハ。鶉鳴も。堀の内
 柚の花ハ。昔とて料理の間

玄妙切

春ややうきこととて八月と梅
 わくくと目ハつれあふ秋の風

大まじ

辛寄の松花より朧で、
行春をあらうの入とくま。

無名の切

名月の花うとくえて棉島、
一家を杖ふち髪の基春、

中の切も、挨拶も、二段切も、三段切も、とまうも、おま
うも、無名の切も、まうも、心切あまど、名目とくま

ハ初字のくま

口合のや

是やこの煤うま
あな古格子 芭蕉

切や

朝がらや、昼六鎖か
うも門の垣 全

捨や

露くく心ふ
浮世もくま

全

中のや

旅うてもうや浮
世の煤ちらん 全

このや

白泉
や黒

き目とわ

すこのや

むえやふ甲の下
のきくも 全

こし

法の細 全

のや

庭掃て出るや寺
ふちる柳 全

名所のや

難波津
や田螺

のうも

疑のや

梅白しきうや、雀とくま
しあき人の小袖も今や土用干

此や疑のや、上ふ疑のや、あうとき、下ふとき、あき
嬉き恋きあき文字、ありしミの過去の一丈

字、又ハふのぬ或はたるるるづるあうの詞とも結
ふあり、又くすつふむるん、のうひい、おも唯

のや何の両用とうるるあり、く、く、結ひ詞、あ
らうま、語格、のをも、但し、味のや、あ、結ひ詞、い

あ、のね、のこ

あひ抄、うも全、同
心の詞あり、中むう、よりハ

やうく疑とうも、とよく、味とうね、とよむ習とあ、
る、く、ね、味、意、うも、三笠の山ふ、く、月、く、こ、も

と疑ふ

あ、のね、のこ

願ひのう、あ、の、
黄菊、ち、ま、

その外の名ハ、あ、
わ、ね、嵐雪

過去せし

い、く、見、
あ、あ、の、

ハ切、あ、あり、
か、う、て、此、

未来のし

こ、く、ま、
類、あ、き、あ、り、

ふのぬ

き、う、あ、く、え、あ、あ、う、ふ、り、よ、
ふ、と、ふ、の、ぬ、く、く、切、あ、あ、り、

畢ぬ

きくぬきくぬき、思ひぬ、おもひぬふ、
 つ つか大く
 とるのど付らうぬ、切るあり、
 里語あわらう、**猿蓑** ゆぬく **下知の詞** けぢ 見よ、
 と人おほきまらうの暮路通
 まていけ、おも人ふ下知する、
 如くあるとて、皆切るあり、**か** 疑ひのかい、
 聞ゆる、見ゆる、おどろく、**よ** 下知ふあらうよ、
 べきと聞ひ、見ひと切く、**猿蓑** 鴉のや、野
 中の杭よ、**奥の細道** 蛤の二見へうききゆく
 十月風雪、**秋** 芭蕉、**炭俵** 八巻、ととまを
 若衆を大根引、**ど** 寒きととより寝る夜を
 野坡、此類のぞく、**ど** ともき、**芭蕉** **猿蓑** 志
 ゐんこの藪より風をわづらうし、**野童** この類のぞ
 ハ疑のやの糸ふつる、詞をて、結むされ、語格との流
 お何そ あハ勿の意あり、〇盃ふ **こそ** これ
 泥ふやうと村樊芭蕉
 かけせてぬへめれ、或ハ、うの結び詞のあらま、
 語格とのをも、〇白魚ふ價あるこそ恨あら、**芭蕉**

まづらんを餅をそくをね挑の花全〇又一例
猿蓑 初とくまも追々ふ咲むこそ **利雪**、**な**
ん あめひ抄 世ふ願ひのふんとつひつけられ、唯ぞ
 と詠らう、詞あり、ちをもちらふんとつる詞と
 おもづ **同上** 今より後とてく、
 一云、**ん** あつこささるる心あり云々 **らん**
同上 其心のづきとてささるるもの、
 同上 らんよりハ、蟻み見定めあづらん心のちぬぬ理
 根越人もある、**けらし** けの字のそひる
 今朝の雪 芭蕉、
 まし **あめひ抄** 世の中ふさえて櫻のあつりせ、
 春のうらみのとけのらま、と里言と何
 て、蕉門の俳諧ハ俗談平話と専門とをい、
 とつる、詞いと稀、**続虚栗** 附 思ふやと物笑、
 花の隅 **ま** 行ま、く、 **めつと**
 其角、
 りんとす、と切る、

釈教の格

涅槃会や御手合も。数珠の音、
灌仏の日。生れぬ鹿の子の形、

戀の格

紅梅や。恋つくる。玉簾、

無常の格

やと死ぬる。きこゆる。蟬の声、
寛祭。つゆ焼場の。より。れ、

追善の格

秋風ふとれて。うれ。き。柔の枝、
當歸より。哀。塚の。萱草、

迷懷の格

ふと。和。肝の。緒。や。う。暮。
父母の。き。う。ふ。ひ。雉の。声、

羈旅の格

ひ。う。脱て。う。う。ふ。ぬ。更衣、
年。と。ぬ。き。き。草鞋。を。ぬ。う、

餞別の格

點の子の。白。奥。送る。別。う。れ、
此。心。推。せ。花。ふ。五。器。一。具、

名所の格

五月雨。ふ。う。れ。ぬ。物。や。瀬田の。橋、
松島。や。千。ふ。ふ。こ。て。夏。の。海、

即興の格

景清。の。花。見。の。座。ふ。ハ。七。兵衛、
ひ。う。き。け。秩。父。の。う。く。角。力。取、

昼晷の格

猊。の。う。う。手。ふ。き。じ。額。髪、
降。と。し。竹。植。る。日。ハ。暮。と。笠、

昼讀の格

山。吹。や。宇。治。の。焙。炉。の。匂。ふ。時、
あ。じ。の。俳。諧。と。ん。め。る。胡。蝶、

置字の格

奈良。七。重。七。堂。伽。藍。ハ。重。櫻、
昼。顔。ふ。ひ。ぬ。せ。う。の。床。の。山、

時宜の格

梅。白。し。き。の。う。雀。と。ぬ。け。ま。け、
や。う。木。子。猶。や。う。木。や。梅。の。花、

時宜とハ其時ハ暇ニ其人ハ對シテ情ト述ルモノハ
前の一章ハ野さらしの紀行ハ三井秋風ハ山家と訪
ふといハ端書ありくおとと林和靖より比しう
時宜あり後の一章ハ曠野集ハ出て細代民部ハ息
ふあひてといハ端書あり句意ハ笈日記ハこれハ
其父弘氏の主此道の凡雅ハ名ある故と云ハ云ハ

賀の格

先祝へ梅と心の冬こもりハ、

雑の格

くらあふハ北突坂と落馬哉、
あきよとハ誰松島とくハ心、

貞享式 今按さるふ名齊は雜の癡句とい一句ふ其所の名と出、其風景の情とつゝちつとて實事とむきとんとせむ、空情ハ
うあふびおとやうあふまはし

押字

何の木の花ともあふひ白ひれ、

上ハ何といふ下ふふとい結びとてとて、
あるをこの下ふふ上の何を押さふと、

抱字

夕顔や秋ハうくの瓢丸、

上ハやいお下ふふとハ結びとてとてとて、
を秋ハのハ文字あて上のやうと抱ふ、



増補歳時記葉草雜之部終

明題此花集

小本二冊

浪華五百題集

三編近刊

初編二編は後海内く好士品を散らす所
地名は形勢なり机とて扱ふるを得

鼎新左自撰句集

近刊

江戸日本橋通三丁目

山城屋佐兵衛

發行

尾張名古屋本町七丁目

永樂屋東四郎

大坂久寶寺町心交橋通

河内屋源七郎

書肆

